

リモート面会の社会学  
家族はなぜ会いに行き続けるのか、何が問題となるのか？

木下衆（慶應義塾大学）

【背景】2020年以降の新型コロナウイルス感染症の流行は、高齢者介護の分野においても、大きな影響を生じさせた。例えば、2020年3月28日に新型コロナウイルス感染症対策本部が決定した「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」では、「医療機関及び高齢者施設等において、面会者からの感染を防ぐため、面会は緊急の場合を除き一時中止すべきこと」とされた。仮に高齢者が施設に入所していた場合、その家族は面会できないつまり「直接会えない」ことになったのだ。

一方、コロナ禍が長期化する中で、高齢者施設の中から新たな取り組みが始まった。例えば、「リモート面会」の試みだ。リモート面会にはいくつかのバリエーションがあるが、私が調査を行っている施設Xでは、次のような段取りで実施されている。まず、施設3階にある入居者のスペースと、施設1階にある面会者用個室が、タブレット端末を利用して中継される。入居者の横には施設職員がサポート役としてつき、やり取りを見守る体制をつくる。そして準備が整った段階で家族は面会者用個室に入り、面会が始まる。施設Xでは2020年末以降、このリモート面会が導入され、現在も継続している。

私の調査協力者であるI（60代・女性）も、このリモート面会を利用する一人である。彼女はこの制度を利用し、認知症の母K（90代）を、定期的に見舞っている。

しかしこのリモート面会には、それまでの面会と比較して、大きな制限がある。直接会えないのはもちろんだが、開催日が限られ、予約制である上に、面会時間が1回あたり15分程度と、厳しい制限下にあるのだ。

【目的】そこで本報告では、家族はなぜリモート面会を利用するのか、そこで何が問題となるのかを、明らかにしたい。Iは、さまざまな準備をし、交通機関を乗り継ぎ、Kとの面会に向かう。家族はなぜ会いに行き続けるのか、社会学的に考察する。

【方法】私は2021年2月以降、IとKのリモート面会の様子を複数回ビデオ撮影し、またIとその家族へのインタビュー調査を継続的に実施している。今回の報告では、そのデータを分析する。

【結果】Iがリモート面会へ行き続けるのには、「新しい認知症ケア」の理念が影響していると考えられる。Iは、認知症が進行した母Kの「その人らしさ」に価値を置いていた。コロナ禍前は毎週欠かさず、Kにとって楽しかった記憶を「更新」し「補って」あげるため、面会に行き長時間ともに過ごしていた。そうやってはたらきかけるのは、家族である自分にしかできないケアだと自負していた（木下衆、2019、『家族はなぜ介護してしまうのか——認知症の社会学』、世界思想社）。コロナ禍は、そうした「その人らしさ」を保つケアの機会を奪った。だからこそ、少しでもKの「刺激」になるように、Iはリモート面会へ通う。Iは、Kの人生（ライフヒストリー）を参照し、短い面会時間に提供できる話題の準備を重ねていた。

ところが、リモート面会はトラブルの連続だ。まず、施設X内の通信状況が悪い日がある。Xの館内は広く、コロナ禍前は通信環境を整備していたわけではなかった。さらに、音の問題がある。Xが用いているタブレット端末のマイク機能が、Kの音量を考えると十分に音を拾ってくれないのだ。そのためIはしばしば、Kに自分の話が「聞こえていない」のか、聞こえているのに「反応がない」のか、それともKが何か言っているのに「マイクが拾っていない」のか等、さまざまな可能性を考慮しながら話しかける必要があった。

だからこそIは、リモート面会終了後の洗濯物の受け渡しを、大切にしていた。面会終了後、Kの横についていた職員が、Kの洗濯物をIへ預けに来るのが、ルーティンとなっていた。この機会を捉え、Iは必ず、Kの様子を質問している。ここでのやり取りは短く、インフォーマルなものだが、Iはそこから多くの情報を得ていた。

IはKの状態を、Kのライフヒストリーや職員との相互行為など、複数の要因から解釈する。報告では、事例の中でも特徴的な場面を複数分析し、コロナ禍における認知症介護の一つのあり方を検討する。

なお本研究は、JSPS 科研費 19K13916、19KT0022、20K02109 の助成を受けている。

キーワード：認知症、介護、リモート面会